

思はれる注意を力説したい。といふのは児童をあまり見くびらぬことである。或論者は思考作用の如きは最も遅く發達するもので児童には思考がないとさへいつて居る。併しカ氏もいへる如く論理的思考の萌芽は此の期にも明らかに認める所で、區別と比較てふ根本の作用はこの時から注意してやらねばならぬ。固より發達に叶つた取扱が重要ではあるが、この時代から明晰なる思考の基礎を作らなければならぬ。といつて決して難きを求めるのではない。感官の練習と共に感覺を土臺に置いた思考の萌芽の涵養に都合よき状態に児童を置かねばならぬ。思考の發達に重要なものは言語であるから、言語に關する注意、及び事物の直觀か

ら得る區別、比較の注意、即ち材料を提供するに努めねばならぬ。といつて固より此の期に思考の修練などは或意味に於ては不可能であるが、それを取扱者は眼中に於いて材料即ち事物の供給を豊富にして児童の知力むしろ直觀練習の機會を造つてやらなければならぬ。一言にしていはゞ児童の能力が發達しないくといつて手を挿いて居ないで、發達した方面を考慮に入れて分相應の取扱をせねばならぬ。かくて茲には誤れる児童心理に捉はれないことを注意したい。詳しく述べあまり長くなるから一般的の注意に止めて置く。次回は第三期即ち幼稚園児童の發達と取扱とになるから、今少しく詳細に述べて見やうと思ふ。』(つづく)

## 『ジエーン・アイア』

(三)

英文學に現はれたる子供(十五)――

岡田みつ

ジエーンは自分とロイド君との對話から、又

シーコアボットとの物語から推して、病氣を癒さ

うとの奮發心を起こす程に、希望を聚め得た。身の上に變化が起りさうなので、ジエーンは其を樂みにして、黙つて待つて居た。が、その變化は來ないで、幾日も幾週も経過した。

ジエーンの健康は疾くに回復したのに、此子の思ひ耽つてゐる問題に就いては、少しも話が出なかつた。リード夫人は、恐い目をして時々ジエーンを覗たが、物を言ふ事は滅多に無かつた。夫人はジエーンが病氣になつて以來、子供等との間を一層隔てゝ、夜は小さな部屋に獨り就寝ませ、御飯も別にし、他の子供達は始終客間に出て居るのに此子だけは子供部室で一日暮させた。それであつて、ジエーンを學校へやるとの素振りも見せなかつた。併し、ジエーンは夫人が自分を見る顔付に、前にも倍して、堪へがたい憎惡の情が見えるので、同じ家の中に長くは置くまいと自然に見込みを付けた。

エリザとデヨージアナも、母の命を奉じてゐる

らしく、ジエーンにはほとゝ口をきかなかつた。ジョンは、ジエーンを見る度に、頬の中で舌を突張らせるのであつたが、一度手を擧げて打たうとした事があつた。ジエーンは、此前の騒ぎを引起了時と同じく、深い怨恨と前後見ずの反抗心に驅られて、此方からも對抗<sup>むかつ</sup>ていつたので、ジョンは退くが得策と思つたが、嘲罵をあびせながら「ジエーンが鼻柱を折つた」と言張り／＼逃げ去つた。實際、ジエーンは指關節<sup>指くわじ</sup>でいやといふ程に、彼の出張つた鼻柱を狙ひ打つたのだが、ジョンがそんなに打たれても、又、ジエーンの憤怒の形相を見ても、平氣で居るので、ジエーンは此機を外さず猶も進んでと、勢ひ込んだが、その中に敵は母親の許へ逃げ了<sup>は</sup>せて終つた。やがて、ジョンが泣聲で「あのジエーン奴<sup>め</sup>が、氣狂ひ猫のやうに僕に飛び付いて」と告口を始めるのが聞こえたが、「ジョンさん、あれの事は言ふのは御止め。あれの傍へいらつしやるなど、母さんが言つたでせう。彼れ此れ文

句をいふ價值はない。御前さん方に、あんな者と一所になつて貰ひたくないのだからね。」と夫人が厳しく窘めてゐる様子であつた。

それを聴いたジエーンは、階段の欄干から下を瞰いて、前後の考もなく、急に、「其方から、私と一所にある價值がないくせに。」と怒鳴つた。

一體リード夫人は、どつちかといへば肥つた婦人であつたが、此不敵の雜言を聞くや否や、軽くと階段を走り上つて、旋風の如くに、子供部屋へジエーンを追籠め、ベッドの一端に押し付けて「其處から一寸も身動きをするな。今日中一言でも口をきくな。」と聲に力を入れて脅嚇した。

「リード伯父さんが生きていらつたら、何と仰るでせう」と、ジエーンは、殆我知らずに言つた。我知らずといふたのは、さう言はずと意志が決定せぬうちに、舌がその語を出して終つたので、自由意志で抑へる事の出來ぬ何物か、夫を言はせ

たのである。

「何?」とリード夫人は小聲にいつて、平常冷やかに静かなその眼に、恐怖とも思はれる色が浮んだ。而して、ジエーンの腕を掴んでゐた手を放して、ジエーンを見入つた顔には、「之は人間の子か、其とも鬼ではないか。」と疑がつてゐる様が見えた。ジエーンは、今こそと思つて、

「リード伯父さんは天にいらしつて、伯母さんのしたり、思つたりなさる事を、皆見ていらつしやる。私の父さんも、母さんもそうだ、伯母さんが一日私を押し込みで置いたり、私を死んでもしまへばよいと願つて御出の事も、皆は、承知してゐます。」と云つた。

リード夫人はちきに勇氣を回復し、この悪い小女を非道く搖ぶつたり、耳を打つたりして、無言で出ていつてしまつた。ベシーは、暇に一時間も説法をしてきかせて、「あなた位極惡な、人に見放されてゐる人はない。」といつた。ジエーンも、其

時胸中には悪い感情ばかりが湧き上つてゐたので、ベシーの言が當つたると自分も大方思つた。

十一月、十二月と過ぎ、一月も半ば経つた。クリスマスと新年の御祝は、此邸では例年の通りに行はれ、贈物の交換があり、晩餐會や夜の會が催された。但し、ジエーンの與つたのは、エリザとデヨージアナが日々衣服を着換へて、客間へと、薄地マズリンの服に、深紅の帶を〆め、髪を美々として縮らせて、下りて行くのを見ると、其から後、客間で彈ずるピヤノや立琴の音、給仕や取次が彼方此方へ往來する足音、茶菓の出の時のコップや皿のガチャ／＼といふ響、客間の戸が開いたり閉つたりする刹邊に漏れる途切れ／＼の話聲を聞くのであつた。之にも倦さると、ジエーンは階段から身を退いて、寂寥たる子供部室へ歸るのであつた。部室の中は陰氣だが、さればとて、さう慘でもなかつた。正直にいへば、ジエーンは、自

分を見返つてもくれぬ來客の中へ出たいとは、少しも思はかつた。唯、ベシーが優しくして、相手になつてさへ呉れ、ば、男女の御客の一一杯ある部室へ行つて、リード夫人の恐い目ににらまれてゐるよりは、ベシーと共に居る方が結構だと考へた。併し、乳母は令嬢たちの御化裝が済むと、臺所とか女中頭の室とか、陽氣の處へいつて終つて、大概蠟燭までも持つていつてしまふのであつた。すると、ジエーンは爐の火の燃落つるまで、人形を膝に載せて、ちつと端座し、其薄暗い室には、自分だけで、他に恐ろしいものは居ないのだと念を推すやうに、時々四方を見廻した。餘爐がいよ／＼盡きかけて、赤色が鈍つて來ると、ジエーンは着衣の駄目や紐をむやみに引張つて、急いで、寢支度をし、ベッドに潜り込んで、寒さと暗さとを凌ぐのであつた。而して、其ベッドへ、缺かさず人形を連れていつた。人間は、何か愛を注ぐものが無くては居られぬものなので、ジエーンは愛するも

のに事を缺いて、色の褪めた、みすぼらしい事、案山子の雑形のやうな人形を慈愛んで、僅に樂みをとつた。ジエーンは、この木偶が生きてゐて、感覺があると幾分思つたので、馬鹿氣である程に本氣で之を可愛がつた。それを自分の寝衣に包んで傍へ置かないと、眠られないのと、それが自分の傍に無事に暖かに寝てゐる時は、さぞ心地よからうと思ふに連れて、自分までが多少慰められるのであつた。

御客が立ち去つてから、ベシーの足音が階段に聞ゆるかと、待つ間の時間は長いやうな氣がした。折には、ベシーが指抜とか鉄とかを取りに、又、さもなくば御茶受けにと御菓子をもつて、中途に上つて來る事もあつた。さういふ時は乳母はジエーンが食べる間ベッドの上に坐つて待つてゐて、食べてしまふと夜着を被せてくれて、「お休みなさい。ジエーンさん」と優しく挨拶をしてくれたりした。ベシーがかう優しいと、ジエーンは世の中に

之程美しい親切な人はあるまいとさへ思つて、いつもかういふ様に機嫌をよくしてゐてくれて、自分を小突きまはしたり、小言をいつたり、いつもがちのやうに、むやみに使ひ散らないでゐて欲しいと切に〜希つた。

一月の十五日、朝九時頃の事であつた。ベシーは朝御飯に下りていつて、此家の子供達は未だ母親から召されないでゐた。エリザは帽子を被ぶり、暖い他出のコートを引掛けて、鳥の餌をやりに出掛けやうとして居た。此子は鳥を飼ふのが好きなのだが、臺所へその卵を賣つて、賣上げを貯へるのも大好きだつた。エリザは商賣氣があつて、金溜屋で、卵と鳥肉を賣るばかりか、草木の根や、種子や、挿枝を強談判をして園丁に賣付た。(園丁は、リード夫人から、令嬢の望みに任せ何でも買へと言付かつて居た)。エリザは、澤山利益のある見込さへつけば、自分の髪でも手放しかねないのと、而してその所持金を、初の内は、古切や、紙

屑に包んで、人の氣付かぬ隅に藏したものだが、女中共に見付けられた事があつて以來、盗み取られるのを恐れて、母親に預ける方法を探つた。それをまた非常な高い一五割六割一の利子で預けるので年四回にキチン／＼と利子を請求して、精細に帳面に記入してゐた。

デヨーデアナは、高い腰掛けに坐つて、鏡に向つて髪を梳しながら、抽出しに一杯入つてゐる中から、造花だの、色の褪めた鳥の羽を取り出して髪に飾つてゐた。ジエーンは、ベシーが戻る迄に、ちやんとして置けと言付けられたので、ベッドを整頓して居た。(ベシーは近來此子を下働きに使って部室の掃除などをさせるので)。ジエーンは掛蒲團を擴げ、寝衣を疊んで、それから散らかつてゐる書本や、人形の道具を片付けやうと、窓の方へいつた處が、デヨージアナが「私の玩具に手を付けてはいけない」と急に制したので、そのまゝ止めてしまつた。他にする用事もないのに、窓の霜花

に息を吹き掛け、ガラスを一部清めて、戸外の、甚い霜で氷り固まつてゐる地面でも見やうとした。此窓から、門番の宿と、馬車道とが見えるのだが、ジエーンが丁度窓硝子の霜模様を溶して、今しも外を視やうとした途端に、門がちと開いて一臺馬車が乗り込んで來た。ジエーンは、馬車が道を上つて來るのを何氣もなく見てゐた。馬車は折々此邸に來るが、ジエーンに關係のあるやうな御客の來た例はなかつた。その馬車は、邸の玄關前に止まり、案内のベルが高く響いて、新來の客は内へ入つた。自分には何の關係もないのだが、ジエーンは目を移して、こんどは餓じさうな一羽の小鳥に注意を向いた。其小鳥は、窓際の葉もない櫻の樹に止まつて、嘲つて居た。朝御飯の、パンと牛乳の食べ残しが卓子の上にあるので、ジエーンは、パンの一小片を碎いて、窓の敷居に載せてやろうと、窓枠をグン／＼引張つて居るところへベシーが階段を駆け上つて來て、

「ジエーンさん、前掛を御除しなさい！何をし  
ていらつしやるの、今朝、顔を御洗ひなすつた  
の？」といつた。鳥が、パンを食べるやうにし  
てやりたいと思つて、ジエーンは、返事をする前

に、もう一息窓枠を引張つた。窓がやつと開いた  
ので、パン屑を窓の敷居の石の上、櫻の枝などに  
散らして、其から窓を閉めて、

「いゝえ。今やつと掃除をしまつたところ。」と答  
へた。

「眞實に厄介な御子ね。今何をしていらつしや  
るの。悪戯をして御出のでせう。赤い顔をして。  
何だつて窓を開けたのですよ。」

ジエーンは、答へる勞を取るに及ばなかつた。  
ベシーは、辨疏を聞いて居る暇はないとのやうに  
急いでゐて、いきなりジエーンを洗面臺の處へ引  
摺つていつて、石鹼、水、タオルで荒つぼくしか  
も手短かに、顔や手を引擦つて、強毛のブラシで  
髪を撫で付け、前掛を除させ、階段の下り口まで

せかし立て、「下の御座敷で御用があるのですか  
ら、早く下りていらつしやい。」と言つた。

誰が自分に用があるのであれば、リード夫人も其處  
に居られるのだから、聞きたいとジエーンは思つた。  
併し、もうベシーは立去つて、子供部室の戸をぐ  
めてしまつた。ジエーンは、徐々と下りていつた。  
もう三ヶ月も、伯母の許へ呼ばれた事がなく、子  
供部室にばかり閉ぢ籠められてゐたので、食堂だ  
の客間だのいふのが恐ろしい場所のやうに思はれ  
て、其處へ入るのが辛かつた。

ジエーンは、今人の居らぬ廊下に立つて居た。  
前が座敷で、その前で怖がつて震へながら立ち止  
まつてゐるので、この子は不當の罰を受けた結果  
何事にも恐ろしさが先に立つて、此頃甚しい憶病  
者になつてしまつてゐた。子供部室へ戻るのも怖  
いし、座敷へ進むのも怖いと、十分間も苦悶し躊  
躇して佇んでみると、座敷からベルがひどく鳴り  
響いたので、如何しても入らなくてはならなくな

つた。

「誰が私に用があるのだろう」と心に尋ねながら、兩手で戸の取手を廻しても、一寸はジエーンの力では開かなかつた。リード伯母さんの他に、どんな人が居るのだろう、男か女か、」取手がまはつて戸が開いた。ジエーンは、中へ入つて丁寧に御辭儀をして、顔を上げた時に、目に入つたものは黒い柱であつた。始めの一目には黒柱と映じたの

だが、實は丈の龜くまで高い、細長い、黒衣の人が敷物の上に立つて居たので、その頭邊の獰惡の顔は、柱でいへばその頭部を飾る彫刻の假面ともいふべきであつた。

リード夫人は、爐の傍の平常の場所に席を占めてゐて、手真似でもつと近くと知らせたので、ジエーンは進み出た。

「之が豫て御話してあります少女で。」  
と、夫人はその石のやうな人に、ジエーンを紹介した。

その人——男なので——は徐ろに、首をジエーンの方へ向け、瑕を探さうな眼を太い眉毛の下から

光させて、さんぐり熟視て、嚴かに低音で、

「形は小さい。幾歳ですか。」

「十歳。」

「そんなですか」と疑ひ深さうに答へて、又暫時検査を續けた末、ジエーンに向つて、

「名は何といひますか。」

「ジエーン・アイアと申ます。」

と答へると、同時にジエーンは上を見た。如何にも丈の高い人で、顔の道具が大きくて角々しく、手足體形までもギクシャクして固苦しかつた。

「ではジエーン、御前大人しい子かね。」

然りと答へる譯にも行かず——この子の周囲の人々の意見は其反対なので、——ジエーンは黙つて居た。リード夫人は、殊更らしく首を振つてジエーンの代りに答へた。而して言ひ足すには、

「プロックルハーストさん、其點は、あまり仰ら

ぬ方が却て宜しいので。」

「それはどうも悲しむべき事ですな。この子に熟

と言つて聞かせなければなりません。」

と言つて、垂直の態度を改めて、リード夫人に相

對して肱掛椅子に腰を下ろして、

「此處へ御出でなさい。」

ジエーンは進み出ると、其人は彼女を自分の眞

正面に立たせた。向き合つて見ると、何といふ顔

だらう。大きな鼻で、大きな口、何てまあ悪い目

立つ歯だらうと、ジエーンは思つた。

「不良な子供といふものは、世の中で一番なきけ

ないもので、別けても不良少女は困ります。悪

人は死ぬと何處へ行くか知つてゐるかね。」

「地獄へ落ちます。」とジエーンは、無造作に、正

しく答へた。

「地獄といふのは何です。解るかい。」

「火の一杯燃えてゐる穴です。」

「御前は、その穴へ落ちて、始終燃やされてゐた。

いと思ふかい。」

「いゝえ。」

「其處へ行かぬやうにするには、如何したらい

ゝ。」

ジエーン一寸考へた。

「身體を丈夫にして、死なゝいやうにするので

す。」と思ひ付いて、答へたが、相手の氣に入ら

なかつた。

「どうして始終丈夫にしていられるものか。御前

よりも年の行かぬ子でも、毎日のやうに死ぬ。

つい二三日前にも、五つになる子供の御葬式を

したが、その子は、善良な子でしたから、今は

魂が天にいつてゐる。御前が、今此世を去れば

そろはいくまいと思ふが。」

其人の疑念を晴らさせ得る境遇でもないので、

ジエーンは、敷物の上に頑張つて居る彼人の大き

な足を見詰めながら、此處から抜け出して遠くへ

行きたいと思ひく、嘆息をした。

「その嘆息が心から出て、御恩になつたこゝの奥さんに、御迷惑を掛けたのを後悔するのだと宜いが。」

「恩人！ 恩人だとさ！ 皆が、リード伯母さんの事を私の恩人だと言ふが、もしほんとなら、恩人といふものは厭なものだ。」とジエーンは内心に思つて居た。

「御前、夜も朝も、御祈りをしますか。」

「はい。」

「聖書を讀むかい。」

「時々。」

「喜んで讀むかい。聖書は好きかね。」

「處々好きです。」

「詩篇は？ あれは好きだろう。」

「いゝえ。」

「嫌い？ 呆れたものだ！ 私の子は御前よりも年下だが、詩篇を暗記してゐる。その子に、御菓子を上げやうか其とも詩篇の一節を覚えるかいと

尋ねると、「詩篇の方を。天使は詩篇を願ふでせう。私は此世の小天使になりたいから」といふ。それで、子供ながら信心深いのは感心だつて、却て御菓子を二つ貰ふやうになる。」「詩篇は面白くありません。」とジエーンは言つた。

「それで御前の心の悪いのが分る。神様にその心を新しい清い心と換へ、石の心を取去つて肉の心を下さるやうに願はなくてはいけない。」  
如何したらば心を取換へられるか問ひ質さうと思つてゐるうちに、リード夫人は、ジエーンに坐れといつて、自分が對話を續けた。